# 復興へ　若い力あつめて

## ●全国青年ボランティアセンター

### 全国青年ボランティアセンター

日本民主青年同盟（民青）が、震災直後に全国によびかけ、これまで4次にわたってとりくまれてきました。全国から青年・学生が被災地にかけつけ、被災者の願いにこたえた活動にとりくんでいます。

津波で浸水した民家の床下から泥をかきだす青年たち
=2011年5月、仙台市若林区

夜の交流会で経験を語り合う青年たち
=2011年5月、岩手県一関市

福島市内の宮代仮設住宅で米や野菜をお届けして要望を聞くボランティア
=2012年4月、福島市

被災者の要望を聞き取る青年ボランティアの女性たち
=2012年5月、宮城県石巻市

保育士の2人が紙芝居を始めると、子どもたちの輪が広がりました
=2011年8月、宮城県石巻市

---

1年5月9日（月曜日）　しんぶん　赤　旗　（第3種郵便物認可）　若者のページ

## 岩手・陸前高田

### 民青同盟員などのべ550人

日本民主青年同盟が4月27日～5月8日に岩手県一関市に開設した東日本大震災の全国青年ボランティアセンター。北は北海道、南は沖縄から約200人（のべ550人）が駆けつけ、津波の深刻な被害を受けた陸前高田市で支援活動をしました。青年らはどんな思いで参加し、被災地で何を感じたのでしょうか。　（記事・写真　細川豊史）

# 被災者の支えになりたい

## 励まし励まされた青年ボランティア

海岸の流木を片付ける青年たち

### ACTION1　いま行くしか

「自分にできることがあるかも」。大学2年の望月あさなさん（20）＝横浜市＝は民青同盟の街頭宣伝で知り、参加しました。望月さんの誘いに大学3年の佐野文香さん（20）＝同＝も「自分も何かやりたいなと思っていた」と応じました。

大学4年の本間淳子さん（21）＝甲府市＝は、震災を初めて「人ごとじゃない」と感じました。山梨も揺れが大きく、ガソリンが一時手に入らなくなりました。「社会人になったら簡単にボランティアには行けないし、今行くしかないと思った」

「活字だけでは分からないことがある」と語るのは、沖縄県から駆けつけた宜野湾市の大学3年の男性（23）。同県の東村高江で米軍ヘリパッド建設に反対する住民が防衛局と対峙（たいじ）する場面を見た時に感じた気持ちです。

岩手には仲間のカンパで来ました。「被災地で見たことを人に話すのも大事だと思う。復興のために沖縄でもできることをしたい」

側溝の泥を取り除く

### ACTION2　住民の信頼感

青年たちの活動は住民に信頼を広げました。漁師らと力を合わせて流木を片付けるなど、住民と一体となって活動する姿がありました。

田谷地区では道路脇のがれき撤去や側溝の泥の除去をしました。

住民の村上力さん（67）は「助かります。みなさん一生懸命やってくれて。これからの日本を背負うのはこういう人たちですね」と笑顔を見せました。

震度6強の地震と津波に襲われた茨城県日立市のコメ農家で自らも田んぼの一部が浸水した根本雄一さん（30）は「困っている人の力になりたい」と、チェーンソーを持って軽トラックで来ました。

根本さんらは、佐々木隆一さん（54）の雑貨店兼自宅裏に流れ着いた大きな柱をチェーンソーで切り分けて撤去。安堵（あんど）して「いやー、助かった。みなさんが神様に見える」という佐々木さんに、青年らは笑い声を上げました。

同じく日立市の中山民美（ひとみ）さん（26）＝栄養士＝は、広田小学校での炊き出しを手伝い、住民の小松安希さん（28）と出会いました。小松さんは津波で母親を失い、被災した職場を解雇されました。2人は震災の苦労を話し合いました。

「遠いところまで来ていただいてすごく心強く、パワーをいただけます。何とお礼していいかわかりません」と話す小松さん。中山さんは「大変な思いをしているみなさんに逆に励まされます」と語りました。

小松さん（右から2人目）と一緒に食器を洗う青年らレイアウト　羽室音矢

### ACTION3　復興への力に

被災地に着いて初めは惨状に言葉を失った青年たち。活動し、被災者と会話する中で、知ったこと、感じたことがたくさんありました。

一緒に作業した漁師から津波の話を聞いた京都市の男性（31）は「話を聞いてからは、がれきの柱一つでも誰かの大事な家の一部なのかなと…。つぶれてしまった家の『廃棄して下さい』という張り紙、どんな気持ちで張ったのかと考えさせられた」と語りました。

大学3年の木村星太さん（20）＝埼玉県入間市＝は「復興まで残り99％でも99分割して一つ一つ埋めていけば不可能じゃないと思う。それを埋めるのがボランティアでは？」と話しました。

小林奈那さん（27）＝東京都目黒区＝は、ヘルパーの資格を生かして90代の女性の入浴介助をしました。「震災で人の生活リズムが変わった。『やってあげた』ではなく、よく話を聞いて、被災者が望むことをさせてもらう姿勢が大事では」

民青同盟岩手県委員会委員長の佐々木圭史さん（33）＝盛岡市＝らは、夫とホヤ加工業を営む熊谷サキ子さん（72）のところへ。津波にあった倉庫の屋根の建材を再利用するためにくぎを抜きました。

「ありがたいです。1人、2人ではやる気をなくしてしまう」と笑顔で感謝した熊谷さん。2日目に初めて青年らの前で涙を見せ、長男の妻と大切な知人を失ったと話しました。

「こういう苦しみと向き合っていかなくてはと話す佐々木さん。センターの活動を振り返り、こう語ります。

「最初は復興できるか不安でしたが、全国のみなさんが集まってくれてとても心強く、このエネルギーがあればできると感じます。今回築いた地域とのつながりを大切にして強め、被災者の支えになるボランティアの輪を広げたい」

「しんぶん赤旗」2011年5月9日付

---

1953年6月16日　第三種郵便物認可

# 民主青年新聞

●ホームページ　www.dylj.or.jp　●Eメール　minsin@dylj.or.jp

2012年5月28日（月）　2869号　隔週月曜日発行

見どころ
進路　みんなどうしてる？　（6、7面）
原発に刻印された政治の「二つの異常」　（10、11面）
「好き」ってなに？　（11面）

## 青年ボランティア　全国から延べ1200人

▶仮設住宅で暮らす被災者の要望を聞く青年ボランティア（福島市）

民青同盟が4月17日～5月6日の期間、岩手、宮城、福島に開設した「第4次全国青年ボランティアセンター」には、全国から延べ1200人以上の青年・学生が参加。1100人以上の被災者から実態や要望を聞き取り、家の掃除などの活動にとりくみました。現地の様子をレポートします。（文中は仮名）

# その声を届けたい

### 震災は続いている

宮城のボランティアセンターでは、グループに分かれて地域への聞き取り、家屋の清掃作業などを行いました。沖縄の宮里愛理さん（19）は、「被災地のために何かしたかった」と初めてボランティアに参加。宮里さんのグループが「困っていることはありませんか」と住宅地で要望を聞いて回ると、一人暮らしの佐藤伸子さん（60代）から、「泥をかぶっている椅子（いす）の掃除をお願いしたい」と依頼を受けました。

佐藤さんの家は震災直後、1階が浸水し、家具に泥がかぶりました。「津波で流された人の声が今でも忘れられない」と佐藤さん。掃除は半日がかりの仕事になり、お昼ご飯などの合間に、佐藤さんの話を聞きました。

宮里さんは、「補修しきれていない壁をカレンダーで隠したり、家全体がゆがんでドアが締まりづらいなど、『住む』という当たり前のことが壊されていた。まだ震災の被害は続いていた」と言います。佐藤さんの近所にはヘドロの臭いがする家で住む人、家の補修費1千万円以上を実費で出した人もいます。

▲津波で半壊した家の被害は、外からでは分かりづらい。手前は津波で全壊した家の跡地（石巻市）

### 話すことで力になれる

山梨の大石友里さん（大学3年）も、「復興の力になりたい」と初めて参加しました。聞き取りでは、「話してもしょうがないよ」という原田チエ子さん（70代）と出会いました。「どうやって思いを聞こうか」と大石さんは迷いましたが、「お体の調子はどうですか」と聞いていくうちに、少しずつ打ち解けていきました。原田さんは「実家が全壊し、県内の仮設住宅を転々として大変」と言います。帰り際に「宮城に来たらまた寄ってね」と言われました。「話すだけでも被災者の力になるんだと思えた」と大石さん。

大石さんは被災者の話を聞くなかで、いまボランティアにできることが見えてきました。「一件一件訪問して、丁寧に話を聞くと、『地域の集会場が欲しい』『街灯を設置してほしい』などの声が出される。私たちには支援しきれないことだけど、被災者の声を行政に届けることで実現していきたい」と大石さんは話します。

### 復興を住民任せにしないで

津波の被害が深刻だった沿岸部の住民は、仮設住宅などで避難生活を余儀（よぎ）なくされています。内陸部には、津波で半壊した家で生活を続ける「在宅被災者」もいます。スーパー、病院や金融機関などのインフラ整備が置き去りにされ、自治体も被災者の正確な実態と人数をつかみきれていないのが現状です。

登米市でコメ農家をしている吉岡一郎さん（70代）は、家は無事でしたが畑が津波の被害を受け、昨年は田植えができませんでした。「私たちの世代は、町をつくってきた誇りがあり、『なんでも自分でやる』という気持ちが強い。でも仮設住宅に移り、知り合いがおらず、外出しなくなって体調を崩した人もいる。復興を住民任せにせず、行政の役割を果たしてほしい」（吉岡さん）

（2面につづく）

▲震災後、そのままになっている病院（南三陸町）

発行所　〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-20-2　日本民主青年同盟中央委員会　電話(03)5772-5701　FAX(03)-5772-5702
日本民主青年同盟中央機関紙
定価（税込み）月680円　〒130円　1部340円　郵便振替00180-4-106690　第2・第4月曜日発行